

「ルドルフ基金」実績レポート

家庭行事の中で大切にされているクリスマス。家庭の状況に課題を抱え、保護者の都合で「サンタクロースは来ない」とせざるを得ないおうちがあります。そう子どもに伝えざるを得ない場合であっても、子ども達は心のどこかでサンタさんが来てくれることを他の子どもたちと同じように待っている。

「頑張った君のところにサンタクロースがやってきました！」

チャリティーサンタはその子のための「特別な思い出」の力を信じています。

そして「思い出」は支援の入り口になる可能性があります。

2018年は経済的困窮の家庭に加え、西日本豪雨で被災された家庭にも思い出を届けました。

すべての困難な環境に関係なく、すべての子どもたちに心に残る、特別な家庭の思い出を届けるために。

本レポートでは連携などの仕組みづくりを始め、家庭からの声などを紹介します。

NPO法人チャリティーサンタ代表理事：清輔 夏輝 きよすけ
ルドルフ基金担当理事：河津 泉



NPO法人チャリティーサンタ
Charity Santa

MCF
Mobile Communication Fund
ドコモ市民活動団体助成事業

クリスマス時期に経済的困難な子どもを支える協働の仕組みづくり
この冊子は『ドコモ市民活動団体助成事業』からの助成金により作成しました。



厳しい環境の中にある子どもたちにも
サンタクロースを届ける！

ルドルフ基金活動報告

「ルドルフ基金プロジェクト」とは、2008年より行っている通常のサンタクロース訪問によるチャリティー活動で得た寄付金で、厳しい環境の中にある子ども達へ無償でのサンタクロース訪問とプレゼント提供を行う取り組みです。

チャリティーサンタが行った、経済的不安がある家庭へのヒアリングの中でも、子どもの長期休みにも旅行や自然体験などに連れて行ってあげられないという声が多く、特別な体験に伴う「思い出」が不足しているという意見が最も目立っています。

「当たり前」の思い出がない

時間的、精神的なゆとりも持てない状況にある家庭は、一般的な家庭行事（誕生日、クリスマス、家族旅行など）の経験が得られず、不要な劣等感や罪悪感を抱え、社会的孤立を深めてしまう恐れがあります。

子どもの貧困率が高くなる現在において、行政だけでなく、すべての人が「地域のなかの当事者」として捉え、支えることができれば、子どもたちに希望のある未来をつくることができるはず。

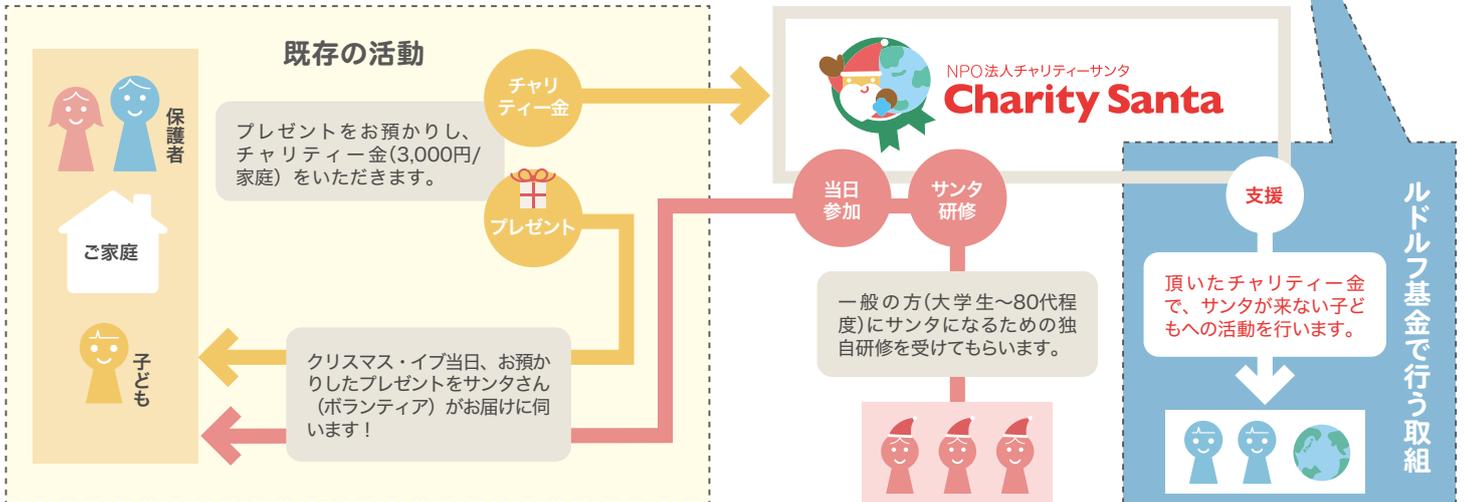
しかし、一般市民誰もが子どもへの貧困に対して行動にうつすのは、現在ハードルが高い状態であるため、多くの人が参加しやすく、支えることができる仕組みを構築する必要があります。

そこで、チャリティーサンタでは「クリスマス」という誰しもが知っている行事を通し、多くの人が子ども達のために働きかけることのできるプログラムをつくり、波及させることを目指しています。



【ルドルフ基金の流れ・図解】

今年も、既存の支援団体と連携・協力し、対象の家庭へ働きかけました。またプレゼントも企業連携を通じ、多くの方からの寄付で集めることができました。



2018年実績

・困窮家庭への訪問

(サンタクロースからの手紙郵送含む)

364 家庭 / 1291 人

2018年は西日本豪雨を受け、急に経済的・精神的に不安定になってしまった家庭に対しても訪問や支援を行いました。上記の数字のうち、被災家庭101家庭にサンタクロースを贈り、881人の子どもたちに思い出とプレゼントを届けました。

2019年はさらに実施地域を増やし、子どもたちに笑顔をお届けができるよう、働きかけていきます!

見えにくい子どもの 貧困のために

「助けてを言いやすく」

昨年、連携団体（該当するであろう家庭の支援をされている団体）に対してアプローチを行い、必要な家庭に情報を届けました。

子どもの貧困は見えにくく、また本人やその家庭が「助けて」と発信することも困難といわれています。チャリティーサンタは、「クリスマス」という素材は、子育て世帯にとってわかりやすいため、「助けて」の思いを発信しやすくするものではないかと考えています。

まだ「助けて」といえていない家庭（既存の支援につなげていない家庭）の想いにも繋がれるよう、連携団体を通じての情報提供にむかえ、2018年は応募をオープンにし、前年は10都道府県のみで実施だったものを全国的に受けられるようにしました。少しながら、クリスマスという情報をたどり、お申し込みいただいた家庭がありました。

ただ、経済的にも時間的に忙しい家庭に情報を届けるのはまだまだ難しい状態です。これからも団体との連携や情報の届け方の工夫をしていきたいと考えます。



▲申し込みページ（2018年度）

ご協力いただいた団体の皆様（敬称略）

- NPO 法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ（全国）●特定非営利活動法人インクルいわて●特定非営利活動法人あきた子どもネット●浜松市社会福祉協議会●認定 NPO 法人フードバンク山梨●シンママ大阪応援団●岡山県男女共同参画推進センター●一般社団法人ほっと岡山●一般財団法人岡山県母子寡婦福祉連合会●広島市中区母子寡婦福祉会●広島市安佐南区母子寡婦福祉会●学生服リユース SHOP さくらや（株式会社サンクラッド）●特定非営利活動法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ・福岡●シンママ熊本応援団●一般社団法人日本プレミアム能力開発協会●グッド・トイ委員会みやぎき●おもちゃ病院●NPO 法人家庭・青少年教育ネットワーク●しんぐるまざあず・ふぉーらむ沖縄

コラム



改めて考える「貧困問題」の意味

貧困には「絶対的貧困」と「相対的貧困」という2つの概念があります。

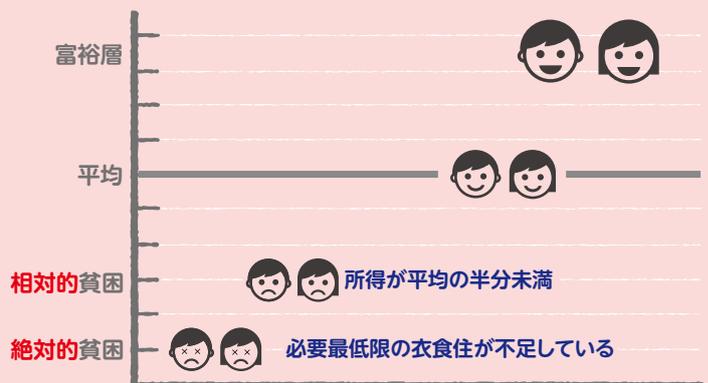
食べ物や住むところがないなど、人間が生きるのに必要最低限の衣食住にアクセスできない層を「絶対的貧困」、それに対してその国・地域の中で普通と呼ばれる生活ができない層を「相対的貧困」と呼びます。



相対的貧困は「見えない貧困」

相対的貧困は全体の「平均」に対して半分以下の所得である状態を指します。日本を含む先進国では、その「平均」のラインが発展途上国などに比べて高いため、仮に平均以下でも、その多くが最低限の衣食住には困らない生活を送ることができます。

しかし「平均」と比較して同じものを手に入れることができない、



同じ経験ができないなどの状態が発生すると、徐々に嫉妬やコンプレックスに悩むようになります。貧困というと、「生きるために必要な最低限のものが不足している」というイメージが一般的に強いいため、相対的貧困の状態が問題であると理解されにくい現実があります。

シングルマザー3人に1人が「クリスマスなんてこないでほしい」

子どもがいる現役世帯の相対的貧困率は15・1%であり、そのうち、ひとり親世帯の相対的貧困率が54・6%と、大人が2人以上いる世帯に比べて非常に高い水準となっています。^{※1}

チャリティーサンタでは対象家庭の実際の生活や状況に対しての想いを確認するために、シングルマザーを対象に調査事業を行いました。

※1「平成27年版 子ども・若者白書」厚生労働省

2017年度の調査結果では「クリスマスなんてなくていい、来ないでほしいと思ったことがある」という設問に関して「ある」と回答したのは36・9%で、シングルマザーの3人に1人が「思ったことがある」という結果になりました。

その理由としては「お金がかかる」「時間がかかる（余裕がない）」「母子ふたりで寂しいから」という回答が目立ちました。

クリスマスが家庭においての最重要イベント[※]であるのは変わらないのに対し、「子どもを落胆させたくない」という思いから、金銭的な圧迫やプレッシャーを感じている家庭が多いことがわかります。

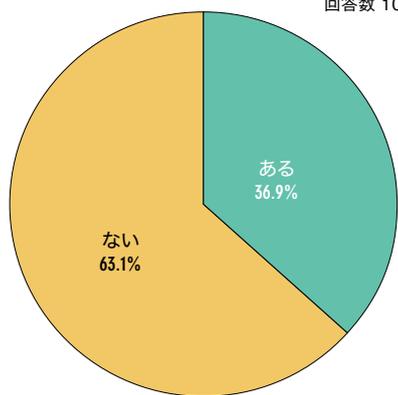
※「サンタ白書2017」

「他の家庭との比較が怖い」そんな声も。

実際に2017年度の申し込み家庭には「昨年のクリスマスはプレゼントどころか夜中に半額になったケーキを購入するのかもしれない」「子どもが他の家庭と比較しないで済むため、冬休みに入っていたことだけが心の救いだっただ」という声も届いており、その切実さが伝わりました。

クリスマスなんてなくてもいい、来ないでほしいと思ったことがありますか？

回答数 103



保護者の生の声

我

が家はひとり親家庭のため、ふたり暮らし。一歳から保育園へ預け仕事をしていた、2年生になった現在は学童へ行っています。そのため家にお友達やお客様が遊びに来ることは一般的な家庭よりかなり少ないと思います。ひとり親としては、週末に他の家族に声を掛けるのも気が引けるので、常にふたり。またはひとり親友達で遊ぶので母親と子どもということになります。アウトドアやイベント、サッカー観戦など、様々なお出かけが出来るように努力していますが、全てひとり親の為に無料で開催されるイベントや、抽選に応募して当選したイベントなので、情報収集や応募には情熱を注いで頑張ります。ふたりでパーティーをしても寂しく、特別な演出も限界がある。せめて小さいうちはクリスマスと誕生日くらいは「特別」にしたい！という思いでチャリティーサンタに依頼しました。

仕

事の掛け持ちをしていて世の中はクリスマスかもしれないませんが、やっとでの思いで1ヶ月生活をしていきます。元旦那が置いていった借金の返済、子ども服も同い年の子から譲ってもらった服、どんなに甘えたいかどれだけ寄り添って欲しいか痛いほど伝わるんですが、私自身もやっとで生活を成り立たせている段階。少しでも息子にあったかいクリスマスになってほしくお申込みさせていただきました。

子

どもが本当に欲しいおもちゃは買ってあげられませんが、やっぱりサンタさんからのプレゼントを楽しみにしているため、日々とても心苦しく思っています。今回こういう素敵なサポートがあると知り、サプライズで子どもを喜ばせてあげられたらとてもいい思い出になるかなと思いついたのですが、お申込みさせて頂きました。宜しくお願い致します。

母

子家庭のため、日々の生活に追われ一般家庭のように旅行や遠方レジャーを経験させたこともありませんが、いつも心苦しい思いがありました。去年チャリティーサンタの存在を知り、いつも我慢させている分、せめてクリスマスにサンタさんに会わせてあげたいなと思ひ、応募させて頂きました。当日は想像以上に喜び、サンタさんが帰っても大興奮。その姿を見て親として色んな感情でこちらまで泣けてきました。



子どもの様子 ~どんな子に届いているのか?~

こないと思つてたサンタが 来た時の感動

サンタを見たことがない4歳の娘。サンタから直接プレゼントをもらったこともないため、「うちにはサンタが来ない」とぼやいていました。

クリスマスイブ、オートロックの画面に映し出されたサンタを見て絶叫、そして落ち着かなく部屋を走り回り、体全体で喜びを表現していました。実際、玄関での対面の際は、かなり恥ずかしかったようで、照れて隠れたりしていました。でも、温かく対応していただき、徐々に緊張もほぐれ、とても楽しい時間を過ごせたようです。

サンタさんが帰った後も、サンタさんとの会話を何度も繰り返ししていました。素敵な時間と夢を与えていただきありがとうございます。今回はひとり親枠での応募でしたので、無料で対応していただきました。サンタさん、スタッフの皆様、絵本の寄付をしてくださった方々など、多くの方々に感謝いたします。

娘が成長したときに、今度は夢を与える側になつてもらえたら母としては嬉しい限りです。



21歳はじめての クリスマス

チャリティーサンタでは今年、21歳の女の子にサンタクローンを贈りました。
Mちゃんは実の両親による虐待を受け、現在は親代りとなつてくれたKさんの保護の元で生活しています。入院を繰り返していたため、自宅でクリスマスを迎えるのは、今年が初めてでした。

本当にありがとうございます。当日まで本人には知らせず、間もなく到着のお知らせメールを頂いてから、

「今日サンタさんくるよ、部屋で待つてね」と話しました。本人は「まさか」。サンタつて親じゃん、Kさんがサンタの恰好するの？ Kさんがサンタになるんですよ」と。

私は「いいから、待つてな〜。」と話して、台所で夕飯の支度。そして玄関からサンタクローンが！
Mちゃんは、最初頭の中が『？』となっていました。

そのあとサンタさんからの「生きていてくれてありがとう」「今までよく頑張ったね」というメッセージを聞いて大泣き。

サンタさん達が帰ってから、私に抱きついてしばらく号泣していました。ビックリと、嬉しさと、感動で動けなくなっていたので、ハグしながらしばらくMちゃんの背中をさすっていました。

今まで、Mちゃんの家ではクリスマスをお祝いはありませんでした。わが家に保護してから最初のクリスマスは、実の親に放置されたまま長年病院に通っていなかった為、診察の結果、命の危機で入院。

今年が初めて一緒に過ごすクリスマスでした。

とても思い出深いサプライズになりました。夜、チャリティーサンタにつ

いて教えました。
長崎県にMちゃんと似た境遇のSN S仲間がいるそうで、探してみたのですが長崎支部は今のところないね、と一緒に話しました。いつか出来るといいなと思います。

Mちゃんにとって初めてのクリスマス思い出に携われたことをチャリティーサンタとしては感謝しています。そして何かしらの原因でクリスマスに思い出がない子どもたちが大きくなる前に、幼少期から「自分は大切な存在なのだ」と感じる事ができる思い出が届く形につなげていきたい、と強く感じました。多くの子ども達に届けることができますよう、努力を重ねていきます。



パートナーシップで広げる支援の形 社会福祉協議会との連携

より多くの家庭に届けていくために、今年パートナーシップ制度を使い、既存の団体との連携を行いました。今回、パートナーシップを結んで活動して下さった倉吉市社会福祉協議会の皆様にお話を伺いました。

チャリティーサンタの活動を 倉吉市で始めたいと思ったきっかけ

私は倉吉市の職員時代、子どもたちを支援するために、子どもと併せて子育てを応援することが大切だと考え、できるだけ楽しく親子の愛着や自己肯定感を育める環境づくりに取り組みました。退職後に社協にご縁があり、FRJ 2018に参加したときに出会ったのがチャリティーサンタの活動です。まずは全体を知るために合宿に参加させていただき、これなら子どもたちも家族もボランティアもみんなが笑顔になれると思いました。そして、企業や市民の協力を得て、市や関係団体・ボランティアと一緒に、倉吉の子どもたちや家庭に合わせたサンタ訪問ができればと考えました。ボランティアには、社会



人のほか、保育士や看護師・保健師等を養成する市内の大学に話をし、学生に参加を呼びかけました。将来、人の気持ちや生活に配慮のできる専門職として活躍してくれることを期待し、倉吉の中に子どもや子育てを応援する輪が更に広がっていくことを願っています。

元常務理事兼事務局長
塚根 智子さんより

活動をしてみたの職員の感想や、 ご家庭やボランティア参加者のからの反応

職員として、最初にチャリティーサンタの説明を受けましたが、普通のボランティアのサンタというイメージでした。12月にサンタ講習会を開催し一緒に講習を受ける中で、普通のボランティアサンタではなく、「本当のサンタになる」のだとイメージが湧いてきたのを覚えています。それはボランティアで参加された方もそう思われたのではないのでしょうか。講習を受けサンタの衣装を身に付けると気分はサンタクロース。私も本番が待ち遠しく感じられました。

本番当日、私はサポートサンタとして出かけました。玄関を開けるとちょっとびっくりしたような子どもたちの顔が、だんだん笑顔になっていく様子を見てこちらも嬉しくなり、帰頃にはみんなが幸せな気持ちになっていました。



訪問を終わりの振り返りの会では、「サンタクロースになって良かった」「来年はもっとたくさんの人にサンタクロースになってほしい」「子どもたちの目がキラキラして感動した」といった声が聞かれました。

訪問した家庭からは「子どもたちがとても喜んでいて」関係者からは「来年は他にも紹介したい家庭がある」といった声が聞かれました。

今年の意気込み

倉吉市では生活保護世帯や困窮家庭、ハンディキャップのある子どものいる家庭、県外から移住して来て、倉吉になじみの薄い家庭などを中心に募集をかけようと考えています。またボランティアは鳥取看護大学や鳥取短期大学の学生を中心に募集しようと思っています。昨年より規模を大きくして開催予定です。

事務局次長兼あんしん相談支援センター所長
河本 勢津子さんより

パートナーシップ制度とは？

通常の支部活動ではなく、パートナーとして連携。連携団体の受益者に対し、チャリティーサンタの仕組みを使っていただき、受益者に対して支援を届ける制度です。現在は、今回の社会福祉協議会のように福祉を担っている団体とをパートナーシップ連携を行うことで、従来のチャリティーサンタでは対応できなかった層への働きかけの強化をめざしています。

関心のある団体の皆様はぜひご連絡をお願いいたします。



災害を受けて 西日本豪雨の影響

災害の多かった2018年

2018年は未曾有の大災害が起きた年でもありません。岡山、広島、愛媛を中心に起きた7月豪雨災害をはじめ、地震・台風などによる全国的に災害の多い年となりました。

私たちが被災地域に サンタクロースを届ける理由

チャリティーサンタのルドルフ基金は、主に「子どもの貧困」へ働きかけるものとしていますが、その他、生活困窮家庭に対しての支援も含めて活動を行っています。生活困窮の視点では「経済的に厳しさを抱え、最低限度の生活を維持することができなくなる恐れのある状態」を指します。

災害は日常の中で突然起こり、生活を一変させるものです。その災害で、住まいや仕事、生活に困りごとを抱えたり、日常の生活を取り戻すために大きな労力が必要とされます。

災害の影響で生活の中にストレスを抱え、環境の変化の中がらんばってきた子ども達に、一年の最後にサンタクロースから「がんばったね」と伝えてあげたい。2018年は災害も来たけど、サンタクロースも来た！と、2018年をHAPPYに締めくくり、子どもたちに一生の思い出に残る体験を届けたい。

NPO法人チャリティーサンタでは、これまで大きな災害があった時には、対象となる家庭・子どもたちには無償で「サンタクロースとの特別な思い出」を贈ってきました。（東日本大震災、熊本地震、九州北部豪雨など）

2018年も、クリスマススイブに「サンタクロースの思い出」を無償でプレゼントしたいと準備を進め、結果881名の子ども達に思い出とプレゼントを届けることができました。



豪雨後、スタッフによる自宅周
囲の提供写真。2018年7月
7日（岡山県）

みなし仮設にも。

サンタクロースだからできる可能性

災害が起き、住まいに被害を受け、自らの資力では住居が確保できない方に対して、行政が民間の賃貸住宅を借り上げ無償提供するものを「みなし住宅」といいます。

在宅避難や仮設住宅では顔見知りがないため、住民同士の関わり合いが自然と生み出されませんが、みなし仮設は住まいもバラバラするため、状況が見えづらい課題があります。

今回は、みなし仮設住宅にも家庭にも思いつく出を届けることができました。「こどもの貧困」の時と同様、「つながりにくいおうちに直接届ける」ことができました。しかし、「子どもの貧困」と同様、その家庭への継続的な情報提供や繋がりへの支援はまだ難しい状況にあり、今後の改善課題と捉えています。



いただいた声

今

回被災して仮設住宅に引っ越したから、と心配する娘。夜プレゼントを持ってくる場所を確認して来てくれたのだと伝えると安心してました。自分の名前を知っていることにも驚いていました。7歳の次女は人見知りなので緊張していましたが、お話をしたりプレゼントを頂いてからは興奮していました。被災してから、カメラを向けてもあまり笑ってくれなくなっていました。サンタさんのお陰で笑顔の写真が撮れました。



困難の中にある子ども達に特別な思い出を

～ あなたもサンタクロースになれる3つの方法～



クリスマスは誰もが知っている特別な日です。

「誰もが知っている日」だからこそ、様々な人が関心をもつ・行動できるきっかけとなります。一般市民のボランティア、企業や資源を持つ団体と連携を通じながら、地域社会と「地域の見えにくいところで困っている子どもたち」がつながっていきける仕組みをつくること。これが私たちのできることなのではないかと考えています。

どんな環境にいても、すべての子どもたちが笑顔になれる1日めざし、チャリティーサンタがみなさんと一緒に始められる3つの方法をご紹介します。

① サンタクロースになる

現在、サンタクロースの希望に対し、なり手（ボランティア）が不足をしています。サンタクロースが増えれば、思い出を届ける先の子ども達も増えます。全国の支部であなただけのサンタクロースの参加をお待ちしています。

10月頃受付開始



② 寄付に参加する

ルドルフ基金の取り組みを通じ、子どもたちの思い出を届けるための準備・仕組みづくりやプレゼントに使用させていただきます。皆様の思いを形にし、子どもたちにサンタクロースを届けます。

③ 企業連携

チャリティーサンタでは企業の「子どもたちのために」を形にするお手伝いをしています。2017年から始まった絵本を寄附用に購入する取組「Book santa」は大きく拡大。2018年度は22都府県200書店で、実施することができました。



▲企業連携により集まった絵本たち

また、ベーカリーアンデルセンでは64店舗で、寄附つき商品販売（特定商品の売上1%が寄附）、大阪イセタン[ルクアイーレ]にて、寄附つき商品販売（売上全額が寄附）といったように自分たちの市場を通じて、子どもたちに働きかける取り組みを行っています。

多くの人に社会課題を知っていただき、身近なところから働きかける土壌をつくるには企業との連携がとても大切だと考えています。何かご一緒にしたいという企業の皆様は是着ご連絡ください。

あなたもサンタクロースになりませんか？

チャリティーサンタ「ルドルフ基金」の取組では、趣旨に賛同する企業・支援団体・ボランティア・寄附者の皆様の参加をお待ちしております。お気軽にご連絡ください。

問い合わせ（「ルドルフ基金」事務局）	rudolph@charity-santa.com	ルドルフ基金の取り組みについて	https://rudolph.charity-santa.com
ウェブサイト	https://www.charity-santa.com	フェイスブックページ	https://www.facebook.com/charity.santa